

○四館連携事業について

1) 四館連携事業について伺う。四館とは、百年記念館、児童会館、図書館、動物園を指しているが、まずこの事業の目的について伺う。

A) 四館連携事業は、平成22年度に策定された帯広市教育基本計画に位置付け、取り組みを始めたものである。新たな学習機会の提供と社会教育施設の利用促進を目的に事業を進めている。事業連携にあたっては、資料の活用をはじめ、展示事業や研究のほか、施設運営などの視点から連携を進めている。

2) 目的については、確認した。事業展開としては、それぞれの施設における長所を連携しながらすすめていくとのことだが、平成28年度は、主にどのような事業を実施したのか。また、実績はどうであったか。過去3年で良いので伺う。

A) 四館連携の取り組みとしては、環境学習をテーマにした「おびひろからわかる地球のようす展」や、夏の夜の時間を活用した「夕涼み生涯学習」、秋の読書週間に合わせた親子で楽しむ「未来に伝えるあそび体験」など、それぞれの施設の特徴を生かした事業を行っている。また、平成25年度からは、これら四館に、緑ヶ丘公園内の近接性を生かし、みどりと花のセンターや道立帯広美術館を加えて、「よりどりみどりがおかフェスタ」を毎年8月に合同で開催しており、相互連携による新たな学習機会の提供と施設の利用促進を図っている。四館の実績としては、平成26年度が、36事業、14,737人、平成27年度が、35事業、15,229人、平成28年度が、27事業、9,840人となっている。

3) 事業において、学習テーマを設け、それぞれの施設の特徴を生かして取り組んでいるこ

とがわかった。この実績の成果は、当初の目標と比べてどう考えるのか。

A) 四館連携事業についての目標値は、毎年、事業内容が変わることから、定めていないが、社会教育施設全体の総利用者数では、平成 24 年度以降、目標値を上回っていることから、一定の効果があったものと考えている。

4) 先ほど事業目的について確認したが、予算措置の考え方と、平成 26～28 年度の予算と決算について伺う。また、決算の内訳について伺う。

A) 予算措置については、ポスターやパンフレットなどの共通経費を除き、事業ごとに主管となる課が必要な経費を予算措置している。決算額については、総額で、

平成 26 年度が、予算現額 659,222 円に対し、420,705 円、

平成 27 年度が、予算現額 640,500 円に対し、479,546 円、

平成 28 年度が、予算現額 673,612 円に対し、559,202 円となっている。

内訳は、平成 28 年度で申し上げると、報償費が 85,000 円、消耗品費が 241,962 円、印刷製本費が 224,748 円、食糧費 7,000 円、通信運搬費 492 円となっている。

5) 経費に告知用のポスター・パンフレットに使われているが、その効果はどうか（市民の反応）。目的にある施設の利用促進に一翼をしっかりと担っているのか。

A) 四館連携パンフレットは、4,000 部作成し、公共施設のほか、駅やホテル、観光施設などに配付している。パンフレットには、各施設の紹介のほか、駅から緑ヶ丘公園までの散策コースなどを掲載していることから、観光客などにもご利用いただいていると考えている。

また、連携イベント「よりどりみどりがおかフェスタ」では、ポスター100枚、チラシ12,800枚を作成し、小学校のほか公共施設やスーパーなどに配付している。チラシは、スタンプ

ラリーの台紙にもなっていることから、多くの子どもたちにご利用いただいていると考えている。

6) 先ほど学習テーマについてお話があった。各施設でテーマ毎に事業を実施しているが、テーマの設定と連携のあり方について考え方を伺う。

A) 四館連携事業のテーマは、施設ごとに業務の性格が大きく異なるため、比較的範囲の広いテーマを設定して取り組んでいる。各施設では、利用者の関心や場所を踏まえながらテーマに対してアプローチを行っていることから、事業内容が多岐にわたっている。また、事業の実施にあたっては、例えば、普段、子供たちが図書館で読んでいる絵本に出てくる虫について、百年記念館の学芸員が図書館に出向き、虫の暮らしを分かりやすく説明するなど、それぞれの施設が有する人材や設備、資料などを有効に相互活用し、より深みのある学習機会になるよう努めている。

7) 地域住民が、市民意識を高め、必要な知識・技術などを身につけ、その成果を社会貢献の活動につなげていけるようにするためには、実践的な学習機会の提供が重要と考える。こうした学習機会が人と人との交流を生みだし、地域づくりに貢献していこうという考えも生まれる。しかし、生涯を通じて学習活動に積極的に参加し、経験を重ねていく人がいる一方で、学校卒業後は、事情により、意図的な学習や社会参加をすることができなくなっている人が少なからずいるのが現状。そこで、今後の事業の考え方について伺う。

A) これまで四館連携事業では、環境学習や親子交流など、それぞれの施設が有する資源を組み合わせ、多くの市民に新たな学習機会を提供してきた。また一方で、学校では、児童生徒の主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の取り組みが進められており、学

校教育と社会教育がよりつながりを強める視点も持ちながら、今後も引き続き、それぞれの施設の特徴を生かした相互連携をすすめ、子供から大人まで、より魅力ある学習機会の提供と施設の利用促進を図っていく。